

# 研究通信

No. 24

1957年8月刊

村落社会研究会事務局  
大阪市住吉区  
大阪市大社会学  
研究室 内

## 本年度大会のもち方について

### 秋の大会について

時日

日

十一月二十三日（土曜休日）、二十四日（日曜の両

場所 東京またはその近傍（会場決定したら追つて通知します）

### 大会スケジュール

第一日（二十三日）

午前九時——午後三時 講題研究発表

午後三時——午後五時 一般討論

第二日

午前九時 午後三時 シンポジウム

「戦後十年農村の変貌」を「村落」と「家族」に分けて引き行う。

午後三時——午後六時 総会及び懇親会

課題報告申込み（本年度は自由課題）は九月末日までに事務局に御連絡下さい。

局として種々考慮をかさねて来ましたが、結局諸般の事情をくんで上の様に予定を組むことになりました。もちろんこれとても確定的なものではありませんが、特別の事情のない限り会員諸賢の御協力を得てこの通り実施いたし度いと思います。

先づ日程ですが、例年の大会が充分論議をつくさず時間切れになることや、他の学会の前後で日が取れないといった不満がありますので、本年は時期的におくれさせて十一月の休日二日続��を利用して、他学会と切離して開催することに致しました。この場合問題は会員による報告者を確定することであつて、もし希望者が二名といつた場合には日程をきりつめなければならぬことになります。この点からも、出来るだけ多くの会員が参加され、特に自由課題のたて前から各方面の問題について多数の報告がなされることを切望して止みません。

次に開催地について、本年は東京以外の地（例えば愛知）を考え、泊り込みで膝つき合せてやれる機会を持ちたいと思つて居りましたが、後記の東京からの意向にもあるように、会員の分布状況や会の現状からみてやはり東京開催の安全さを取ることに致しました。たゞ開催場所については当初の意向にそえるように適当な会場を選んでいたところ、充分論議をつくせるようにならうに思ひます。

大会のスケジュールは、第一日を研究報告に、第二日をシンポジウムにあてております。このうちシンポジウムについては、本年初めての試みでありますので、家族と村落の各々について司会者及び報告者（問題提起者）は事務局側より依頼して、主要な問題点を開いていたところ、後は一般会員の発言による討論を行う予定です。第一日の研究報告については、すでに前回の通信で申上げたように、本年は特定の課題を選定することなく、各会員の最も関心の深い問題について自由に題目を選定してもらい発表していくことにしておきます。したがつて会員アンケートに示されたような多彩な研究閑

村落社会研究会の最大の行事である本年度の大会について、事務局として種々考慮をかさねて来ましたが、結局諸般の事情をくんでの様に予定を組むことになりました。もちろんこれとても確定的なものではありませんが、特別の事情のない限り会員諸賢の御協力を得てこの通り実施いたし度いと思います。

先づ日程ですが、例年の大会が充分論議をつくさず時間切れになることや、他の学会の前後で日が取れないといった不満がありますので、本年は時期的におくれさせて十一月の休日二日続��を利用して、他学会と切離して開催することに致しました。この場合問題は会員による報告者を確定することであつて、もし希望者が二名といつた場合には日程をきりつめなければならぬことになります。この点からも、出来るだけ多くの会員が参加され、特に自由課題のたて前から各方面の問題について多数の報告がなされることを切望して止みません。

次に開催地について、本年は東京以外の地（例えば愛知）を考え、泊り込みで膝つき合せてやれる機会を持ちたいと思つて居りましたが、後記の東京からの意向にもあるように、会員の分布状況や会の現状からみてやはり東京開催の安全さを取ることに致しました。たゞ開催場所については当初の意向にそえるように適当な会場

を選んでいたところ、充分論議をつくせるようにならうに思ひます。大会のスケジュールは、第一日を研究報告に、第二日をシンポジウムにあてております。このうちシンポジウムについては、本年初めての試みでありますので、家族と村落の各々について司会者及び報告者（問題提起者）は事務局側より依頼して、主要な問題点を開いていたところ、後は一般会員の発言による討論を行う予定です。

第一日の研究報告については、すでに前回の通信で申上げたように、

心をこの機会に是非示してほしいと存じます。報告者数にもよりますが一人当たり報告時間は約一時間はとれると思います。なお同封の意向聽取の返信により報告希望の方は、別にレチュメ等につき御連絡いたします。従来例年の大会には課題委員や事務局から発表したいとするような方にあらかじめ依頼をして報告者の数を揃えることが多かつたわけですが、何分かのような依頼ではその範囲も限られ勝ちでありますので、自発的な申込み者によつてスケジュールが充足されることを願つて止みません。特に地理学、歴史学、民俗学等從来大会報告のはほとんどなかつた領域からも積極的に参加していただけるように希望いたします。

(事務局 中島記)

## 通 信

(東京 中野 卓)

前略、年報編修委員会を七月四日に行いました。出席者、小池基之、有賀喜左衛門、森岡清美、中野卓（福武直は実習調査出張中のため不参）。その際、前号「村研通信」の大會予定記事の内容にもとづき、その具体化についての、以上四名の者が話し合いましたところをまとめて、提案とします。他の人々からの御提案と合せて御検討下さいますよう。一、「戦後十年農村の変貌」という題目を掲げただけでは、やはりばくぜんとした感をまぬがれないから、もうすこし問題をしばらなければならぬのではないか。報告者の氏名をも報告内容の概要をもなるべく早くきめて、それらを次号に発表してほしい。

- (4) 一貫して司会者一名をおき、補佐的司会者一名がこれを援助する。
- 以上は前記四名の一一致したところです。

(後略)

## 本年度大会の成功のために

(東京) 福武直

討論の予定発言者少數名もあらかじめきめておくことが必要ではないか（もちろんこれではなく動火線になつてもらうためである）

では、自由課題についても、その発表者を公募する記事と申込方法、期日等を次号「村落通信」に公示する。それと共に、多少個別に

発表を勧誘し促進する必要もあるう。

「大会開催地及び月日を次号でぜひ確定発表してほしい。このことは、自由発表の申込

みにも関係があるから。

二、開催地については、仙台、東京、大阪でこれまで行つて来たので、今年は愛知でどう案は意義があると思う。しかし、今の村研の実情から見て、参会者の集りかたを考えれば、今秋は東京でやる方が人の集りの上であやうげがないのであるまいかともわれる。

三、共同課題的具体的な進めかたについて、次のようなやりかたを提案する。  
(1) 「戦後十年農村の変貌」を、家族と部落構造との二つについてそれぞれの変遷に焦点をしほる。

(2) 農村家族における戦後十年の変貌について、竹内利美、小山隆兩氏に報告を依頼して、後藤和夫、中村吉治両氏に報告を依頼。

## 二・二の提案

(東京) 森岡清美

研究に関する提案ではないので恐縮ですが研究通信の利用について提案をします。この前のアンケート特集号は大変な好評でした。ですから編集部ではもう企画を進めて

本年度の大会は家族と村落の二部門に分け、その後十年の変化を考える計画である

という。このことは、昨年の大会でも提起されたもので、大変結構だと思う。

日本農村の家族や村落は、戦前と変らぬ面をもつと同時にいろいろの面で変動の様相をみせている。その変動の諸側面を、不变の面とともに指摘し、「何故変ったのか」「何故

変らぬのか」「変化と不变の間にいかなる関連があるのか」ということを追究することが今後の研究の課題を示唆することになる。戦後十年を経た現在、こうした点を確定し新し

い研究方向を志向しなければ、われわれの研究は一層の前進を期しえないのである。そ

した意味において、本年度の大会は、今後の村研大会の飛躍のための基礎を固めるものにならなければならない。こうした成果をあげるために、われわれは会員の衆知をあつめて効果的な討議を行うのに必要な準備を考えてみたいと思う。次の会報までに、そうした具體的な方法の案が事務局あてに多数あたらざることを願つてやまない。

おられるのではないかとも思いますが、この種の特集号のはかに、各地区的研究活動に関する特集をつくらうどうでしようか。誰々がどの地域でどのようなテーマについての調査研究をしているかを地区毎にまとめて報告すれば、研究会全体の動きが比較的容易に理解されるばかりでなく、かねてから提唱されている地区毎の協同研究の実情がわかり、またそれを刺戟することにもなると思います。大学が集中している地区では大学毎に、そうでもない地区では県毎にレポーターを委嘱するのも一法でしよう。

次に、会員の業績が出したい（あるいは時期を限つて）編集部に報告し、それを通信に連載ないし特集としたらどうか、というのが第二の提案です。そうすれば時機を失せず購入することもできるし、また抜刷があればそれを割愛していたわけないか照会することもできて、自分の研究領域の文献を集め易くなります。論文の筆者としても、本当に読んでくれる人、是非にと所望してくれる人に抜刷をあげてこそ心の満ちる思いをするものであります。また、村研年報の研究動向欄を担当する人の苦労もそれによつて著しく軽減されましよう。

第三に、戦後懸しい数の報告が出ましたがわれわれアブレガールは昭和十代の論文の読み方が足りないようと思われます。軽視するからでは決してありません。読みたくてもその雑誌が手に入らないので読みようがないというのが実情です。協同研究協同研究といつても読むべきベーシックな研究を読んでいないので、足並が乱れるのも当然のことです

すから、われわれの共通の広場をより一層広げる意味でも、戦前の論文の選集をつくることを提案するものです。有賀先生は「日本婚姻史論」と「村落生活」の二冊に農業の主要な論文を集めて下さったので、お互大いに便益を蒙っていますが、まだその外に有賀喜左衛門集というのができました。勝手にお名前をあげて失礼ですが、小山隆集、喜多野清一集、及川廣集など何冊かの選集ができるのではないかでしょうか。先生方には御予定がおありでしようから、こんな提案をすることは御迷惑かもしませんが、もしこうした一連の選集が出版されたら、研究の推進のためにまた演習テキストとしてどれだけ有益であるか分りません。会員で相当数の予約を確保すれば出版も困難ではないと思いますがどうでしょうか。明治史料研究連絡会の明治史研究叢書を見ると表題となるのは私だけではないと思います。戦前の業績に限る必要もなくまたテーマ別に選集した方がよいかも知れません。ともかく、そうした企画と連絡のためにもこの紙面が有効に利用されてよいのではないかと思い、敢て提案しました。

(六、一五)

### 会員アンケート追加(三)

- 樋谷力 愛知学芸大学  
 (1)現在の研究テーマ、農村における政策法規の実施過程の研究 (2)昨年度の実施調査 (4)山村における親族組織(愛知県南設楽郡作手村) (5)ダム建設の地域社会に及ぼす影響(愛知県北設楽郡高山村) (3)昨年度執筆著書論文  
 (6)農村における政策法規の実施過程の研究  
 (7)明治史料研究連絡会の明治史研究  
 (8)庄屋制度の法社会学的考察 (4)本年度に同じ。
- (1)年報IV「農村過剰人口の存在形態」の編輯について
- (2)農村過剰人口の存在形態  
 (3)福島県日郷村の調査事例を中心として  
 (4)小池基之

告 知 版

吉沢四郎

東京都目黒区下目黒四の七〇

林業試験場内

新入会員紹介

## □農村人口の配分規制

中島龍太郎

## ③農村過剰人口の存在形態

形成の現状とその類型

## (四)題未詳

並木正吉  
西村甲一

## (五)「家」制度と小農制

中野芳彦  
瀬戸内海島村における人口流动の研究

## (六)瀬戸内海島村における人口流动の研究

滝野四郎

## (七)兼業農家の家族構造

北九州近郊農村における通勤農家  
原 宏

## (八)学界動向

## (1)経済学における村落社会研究

島田 隆

## (2)歴史学

大石慎三郎

## (3)社会学

塙本哲人

## (4)法律学

千葉正士

## (5)地理学

渡辺久雄

(2)会費納入者（記載もれと前号以降の分）

昭和三〇年度以降 八木佐市

昭和三十一年度

神谷 力  
吉沢四郎(3)事務局、よりのお願い  
本号も編輯者の多忙等のために予定より発

行がおくれたことをお詫びします。いよいよ秋の大会の日もきまり、休暇等を利用して会員の研究も進められないと存じます。次号の原稿を九月末日〆切で募集いたします。各地の研究状況なり書評なり大会えの希望なりをどうか積極的に寄せ下さい。

なお秋の大会についての報告番号等につき返信を同封いたしましたので、これも九月末までに到着するよう必ずお送り下さい。

毎年の通信で若干返送がありますので特に住所等の変更についてはお忘れなく記入願ます。

以上